

いま哲学者たちはコロナ禍をどうみているのか

浅沼 光樹

1 はじめに——パンデミック

中国での新型コロナウイルスの感染爆発は昨年11月の中旬にはじまり、今年1月下旬になって当局による警告が発令され、ついで同23日に武漢がロックダウンされた。昨年の11月といえばおよそ半年前だが、ずいぶんと昔のようにも感じられる。その後このウイルスは瞬く間に世界中に広まり、場所を変えながら人々の生命を着実に奪うだけでなく、次第に社会システムそのものにまで影響をおよぼし、それにともなって私たちの生活パターンも多かれ少なかれ変更を強いられている。いまもなお終熄の見通しはまったく立っておらず、一旦は衰えたかのように見えても、それは見かけにすぎず、まもなくそれに次の感染爆発が続くという具合である。

この拡大の過程において新型コロナウイルス感染症は covid-19 と命名され、3月の中旬にはそれが世界的流行の状態にあること、つまりパンデミックであることが認定された。天然痘やペストなどパンデミックは歴史上珍しくはない。しかし人類全体の脅威であることになら変わりはなく、そのたびごとに心理的恐怖ばかりでなく、社会生活上の変化も引きおこしてきたが、今回も同様であろう。出口の見えない手さぐり状態のなかで、この危機を脱するために医療や政治レベルの対策に多大な努力が払われているだけでなく、すでに一部の人々の関心はパンデミック終焉後の社会のあり方にも向けられている。

2 知識人のコミットメント

実際このような問題意識から新型コロナウイルス感染症に関する特集が雑誌やテレビなどでも組まれ、各分野の専門家がそれぞれの立場から意見をのべている。大半は医学や経済の専門家だが、なかには哲学者・思想家も含まれている。

感染の中心が中国から西ヨーロッパや北アメリカに移ると、最初イタリアが酷い被害を被った。日本では想像もつかないが、イタリアやフランスでは哲学者の社会的地位がきわめて高く、時事問題についてリアルタイムで発言することがつねに期待されている。このような事情もあり、ある哲学者が発言すると、それに別の哲学者が応答し、連鎖的に議論の応酬が続くという様子がたびたび見られた。しかしたんに社会的地位が高いというだけで、発言も哲学を本業とする人ならではないなら、あえて〈哲学者〉などの出る幕でないという見方も成り立ちえよう。

3 G・ハーマンの見解

〈オブジェクト指向存在論〉と呼ばれる一派の総帥としてグレアム・ハーマンは21世紀哲学の推進者の一人と目されている。コロナ危機について沈黙を守りつづける彼にあるインタビュアーがその理由をたずねた。¹

ハーマンによれば、哲学的思索は刻一刻と変転する緊急事態にリアルタイムに反応できない。むしろある事件によって種が撒かれ、それが結実し

て一つの哲学的思想になるまでには相当の時間を要する。そのため哲学というのは本質的に即効性のない営みなのである。もし哲学のもつこのような本性に逆らって、性急に時事問題に積極的に介入しようとするれば、プラトンやハイデガーのあやまち——哲学的思索と政治的实践の混同——をいたずらに繰り返すだけだろう。仮にそのようなあやまちを犯さない場合でも、哲学者がなしうることには一定の限界がある。つまりこんな時に哲学者ができるのはせいぜい、これまでの自説をあらためて述べ直し、それを倍がけする——再度強調する——ことでしかないのである。

このような発言から判断するにハーマンが社会・経済・政治の問題に対する積極的コミットメントを好まないタイプの哲学者だということは明らかである。しかしここではあえて少しばかり反論をこころみよう。

4 ハーマンに抗して

ハーマンの言うこともわからなくはない。たとえば、ヘーゲルは〈ミネルヴァの梟は黄昏とともに飛びたつ（哲学はいつも現実が遅れてやってくる）〉と語った。ハーマン自身が現実のたんなる追認にとどまっているのかはともかく、少なくとも現実を変革することを哲学の使命と見なさないという点では、彼は青年マルクスよりもむしろ老ヘーゲルに似ているようだ。

しかしここではハーマンに即して、以前から抱いていた思想にもとづいて思想家がいま生じつつある出来事について語るのは本当に無意味なのだろうか、と問いかけてみたい。当の出来事によって引き起こされる変化をささいな変化と見なしうるほど大きな視野でものごとを考えているとしよう。この場合には彼の視野は非常に広く、目下の出来事を包みこむほどだろう。銀河の誕生と死を考える宇宙物理学者ほどではないにせよ、哲学者もたんに数十年単位でものごとを考えているわけではない。たとえばニーチェは、ソクラテス以来の西洋文明の帰結として〈神の死（ヨーロッパのニヒリズム）〉について語ったのだった。

しかし当の出来事を漏らさずつかまえるには彼の思想の網の目はあまりにも粗すぎるかもしれないし、この出来事が今後数千年の変化のはじまりなら投げかけた網はそれにわずかに届かないだろう。このような場合には、いくらタイムスパンを長くともうとハーマンの批判が当てはまってしまう。この点についてはもう少し掘り下げてみる必要があるだろう。

5 パラダイム・シフト

テレビの新型コロナウイルス特集などで、今回パラダイム・シフトという言葉を目にする機会が多かった（特に経済学者などが用いている印象を受けた）。本来、パラダイムとは科学史家トーマス・クーンが『科学革命の構造』において科学的探求の特徴を言いあらわすために用いた概念である。クーンによれば、科学という知的活動は通常科学と科学革命という二つの時期に分けられる。典型的業績（パラダイム）の出現とともに、それを見ならうべきモデルとしながら科学者集団が一丸となって個別の問題解決に取り組むのが通常科学の時期である。しかしこの基本方針のもとでは解決困難である変則事例のたび重なる出現によって現行パラダイムが存続の危機に陥ると、支配的パラダイムの変更（科学革命）が起り、それを新しいパラダイムとして新たな通常科学の時期がはじまる。要するにクーンによれば、科学は累進的ではなく、たえざる解体と飛躍とを含みつつ発展していくのである。

クーンが念頭に置いていたのは百人程度の規模の科学者集団である。しかしこの概念はしだいに発案者の手を離れ、より広く時代（社会全般）のものの見方について用いられるようになった。この拡張された意味においては、ある時代のものの見方を根本的に規定している思考の枠組み（世界観）がパラダイムだ、ということになる。そうすると現代がパラダイム・シフト（パラダイムの移行）の時期だというのは、それが科学革命に相当する一種の過渡期だということ、私たちがこれまで標準的に採用していたものの見方、私たちの思

考の枠組みが、たび重なる変則事例の出現によって、もはや現実の問題解決に役立たなくなり、この枠組みそのものの全面的刷新が求められている、ということである。

ところで私たちのものの見方の単なる部分的修復ではなく、その取り壊しと再設計、あるいはその再発明のためには、いまいちど人類の精神的在庫を総点検し、そこから使えそうなものを選び出し、それらを一から組み上げなければならない。ここで役に立つのは既存のパラダイムの中で思考する人（知者）ではない。かえってむしろ、つねにその手前にあって思考する人、採用されるかどうか分からないパラダイムの可能性の海を泳ぎつづける人、要するに、知を愛し求める人（哲学者）である。²

6 人新生とモートン

人新生

最初に〈人新生（アントロポセン）〉という概念をとりあげよう。これはパウル・クルツェンという大気化学を専門とするノーベル賞学者によって2000年に提起された地質学上の概念である。従来の常識では、氷河期の終焉以後現代まで続く地質年代は完新世と呼ばれていたが、クルツェンによれば、その時代は終わり、すでに人新生と呼ばれる時代に入っているのである。

この地質年代が人新生と呼ばれるのは、人間の活動によって地球の表面が大きく変えられ、恐竜を絶滅させた小惑星の衝突のように、はるか後の時代にまでそれと分かる痕跡を地表に残しつつあるからである。核実験などが最も分かりやすい例だが、人間の活動によりこれまで地上に存在しなかった人工的物質の堆積層が生じつつある。また化石燃料の燃焼は大気中の二酸化炭素濃度の急激な増大をもたらしたが、さらにこの増大は気温の上昇やそれによる生物の移動、海洋酸性化なども引き起こしている。さらに森林伐採などの自然開発は生物の多様性を大幅に減少させ、種の大量絶滅の原因となっている。人新生がいつ始まったかは議論があり、異論の余地のないのは1950年以

後だが、産業革命以後、あるいは農耕開始以後とする意見もあり、この問題が現代の問題でありながら、人類の出現にまで遡ることができる古い問題でもあることを示唆していて興味深い。

クルツェン自身の述懐によれば、彼が人新生という概念を提起したのは、それが環境破壊による最終的破滅の抑止力となりうることを願ってであった。しかし私たちはここに広義のパラダイム・シフト問題を重ね合わせてみよう。そうすると人新生という概念は、それが〈人間は人間自身によってすでに変化させられた自然の内に生きている〉ということ教える限りにおいて、人間と自然の関係をめぐる新しい思考の枠組みを示唆していることになる。

モートン『自然なきエコロジー』

昨年日本語訳が刊行された『自然なきエコロジー』のなかで、ティモシー・モートンは自然の概念を用いずにエコロジーを考えることを提案している。自然は私たちから切り離され、どこかにじっとしていて、たんに征服ないし保護されるのをまっているような存在ではない。それはすでに私たちと共にあり、私たちの内に入りこみ、私たちにさまざまな影響を及ぼしているが、この〈共にある〉という繊細かつダイナミックなあり方は旧来の〈自然〉という概念によってはとらえられない。だから自然という概念は捨て去られるべきだということである。

モートンの「ウィルスとの共生に感謝」³という短文は「ウィルスは美である」という衝撃的な言葉で締めくくられる。そこではウィルス（自然）と私たち（人間）との関係が、たんなる敵と友というような二項対立によっては捉えられない「曖昧」なものであることが語られている。「生き延びる」と「生き生きとしている」と、「生」と「死」はたがいに切り離しえない緊張関係にあり、危ういバランスのなかでしだいに両者の境界がぼやけていくとき、私たちは自然と人間の真の関係を垣間みるのである。

もっともこのことはコロナウィルスを持ち出さ

なければ語りえないような事柄ではない。人間と自然との関係はより包括的で一般的な問題、つまり人間そのものの根幹にかかわる問題だからである。人間が文明への道を歩み出した以上、自然との境界はすでに破られている。一方で人間の定住・都市化があり、他方で野生動物との接触があり、その中間に動物を起点としつつ人間へと感染し、さらに交通網を介して広がっていくウィルスがある。人間が人間であるということは、人間が自然から分離したということではなく、人間が自然とのいっそう複雑な相互関係に入ったことを意味している。このことに適合した〈ものの方〉が鑄造される必要があるわけだ。

7 グローバリゼーションとガブリエル

グローバリゼーション

もう一つ概念は〈グローバリゼーション〉である。人新生に比べるとやや生まれが早く、いっそう一般に流布しているといえようが、その定義は難しい。ここでは国境をこえて（ボーダーレスに）モノ、カネ、ヒトが自由に行き来しうる状況とでも呼んでおこう。背後にはグローバリゼーションによって資本主義経済のさらなる発展が可能になるという発想があり、グローバル化した資本主義は国家によっておこなわれる政治的コントロールの外で自己の成長をどこまでも追求してゆくかのように見えた。

しかしよく知られているように、グローバリゼーションにはさまざまな負の面があり、そうした負の面の一部（先進国における所得格差など）が反グローバリゼーションの流れを生み、英国のEU離脱やトランプ政権の誕生の背景のひとつをなしたといわれている。またグローバリゼーション推進派にも、無条件のグローバリゼーションがリスクを伴うことは、リーマンショックなどの金融危機を通して知られていた。今回のパンデミックはこのような反グローバリゼーションの流れを後押しし、グローバリゼーションの動向に決定的な歯止めをかけるとも考えられている。というのも、加盟国内の人の自由な往来がEU加盟諸国に

おける最初の感染爆発の一因となったという指摘が正しければ、そもそも今回のパンデミックはグローバリゼーションによってはじめて可能になったとも考えられるからである。実際その結果、EU内では国境は一時封鎖され、ほかの地域でも国際的分断がひろがった。

ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』

新世代の哲学者としてわが国でも比較的名前が知られているマルクス・ガブリエルの場合⁴にも、先のモートンの場合と同じようなことが言える。つまり、ガブリエルもまたパラダイム・シフトの狭間にあって、概念の可能性の海から浮かびあがってくる一見奇妙な観念を掘り下げているのである。新型コロナウイルスについて語るときですら哲学者である彼に具体的な経済政策のようなものを求めてはならない。そのようなことをすれば期待はずれに終わるだけでなく、そもそも彼が何をいわんとしているのか皆目見当がつかなくなるだろう。まずはガブリエルの発言の水準に身を置くことが必要である。この水準はグローバリゼーションでもなければ反グローバリゼーションでもない、いわば脱グローバリゼーションを、つまりグローバリゼーションと反グローバリゼーションという対立図式そのものを乗り越えることを目がけている。『なぜ世界は存在しないのか』においてガブリエルが提案していたのは、そのような原理的なものの方の変革だった。

同書の主張は〈世界はない〉と〈無数の意味の場がある〉という二本の柱から成る。これらは〈世界はない〉がゆえに〈無数の意味の場がある〉という形でつながっている。ここで〈世界〉とは〈あらゆるものを包括している唯一の領域〉のことである。もしそのようなものがあるならば、この最大限にグローバルな領域においては唯一の法則が、たとえば資本主義経済の法則が支配しているだろう。しかしそのようなものはない。その目標は到達不可能というだけでなく、そもそも存在しない以上、グローバリゼーションの理念そのものが空中分解してしまう。しかしガブリエルに

よれば、現代の資本主義だけではなく、それを生みだした西欧文明は、つねにすでに最大限にグローバルな領域の存在を暗黙の内に前提し、したがって最初からグローバリゼーションの可能性を秘めていたのである。

とはいえ〈世界はない〉というのとは〈何もない〉ということではない。それは〈世界というあらゆるものを包括する領域だけはない〉ということだからだ。いっさいを包括するものがないなら、ありとあらゆるものを貫いてそれらを束ね、内側から支配している単一の法則（ルール）もない。しかしそれはローカルな法則（ルール）がないということではない。このローカルなルールをガブリエルは〈意味〉と呼び、それによってゆるやかに統括された領域を〈意味の場〉と呼ぶ。しかし〈グローバル〉をまったく前提しない〈ローカル〉を想像するのは難しい。私たちの思考は世界という思想——これがより深い意味におけるグローバリゼーションなのだ——に捕えられているからであり、ガブリエルの言葉を借りれば、ただ〈無世界観〉だけが脱グローバリゼーションへと通じているからである。

¹ Graham Harman, Lockdown and the Sense of Threat.

(<https://baykusfelsefe.com/2020/05/06/tecrit-ve-tehdit-lockdown-and-the-sense-of-threat-graham-harman/>)

² 哲学者 philosopher という語は「知恵を愛する者」を意味する古代ギリシャ語の *φιλόσοφος* (フィロソフォス) に由来するが、この言葉は意識的に知者・賢者 *σοφός* (ソフォス) と区別して用いられている。

³ Timothy Morton, Thank Virus for Symbiosis. (<https://strp.nl/program/timothy-morton>)

⁴ NHK BS1 スペシャル シリーズ コロナ危機 「グローバル経済 複雑性への挑戦」など。

www.jikkyo.co.jp

現代社会がよく分かる、最新の資料集！

2021ズームアップ現代社会資料 新訂版

授業展開スライド・ワークシートあり
B5判／368p. 定価935円（税込）

もれのない学習内容・深く切り込んだ記述・詳しい資料集！

2021新政治・経済資料 三訂版

「小論文トレーニング」が充実
B5判／392p. 定価990円（税込）

見本本ございます

実教出版株式会社